



カオスと分析

梅棹忠夫論

佐々木幹郎

(詩人)

梅棹忠夫という名前を聞いて、日本人ならず最初に思い浮かべるのは、国立民族学博物館の創始者であり初代館長というイメージだろう。六十年代半ばに失明されたが、それから以降に出版された本のほうが、以前のものより多いのは、驚異的な構想力と想像力のたまものだ。

京大理学部で動物生態学を学び、後に民族学、文化人類学、文明論へと、理科系から文科系へ視線と論点を広げていった、その軌跡と専門ジャンルは膨大で、すべて追うことはとてもできない。なによりもこの面での画期的な業績は、『文明の生態史観』という、生態学的に歴史を見るということから出発した、ユーラシア大陸全体の文明の構造論の展開だろう。二十世紀に書かれた本の中から国内・海外十冊ずつを選ぶという、「文藝春秋」平成十年（一九九八）八月号のアンケートの「日本の本

Mikiro Sasaki

1947年生まれ。同志社大学文学部中退。第一詩集『死者の鞭』で詩壇にデビュー。詩誌「白鯨」創刊同人。ミシガン州立オークランド大学客員研究員、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文芸非常勤講師を歴任。著書に『中原中也』（筑摩書房、サントリー学芸賞）、『悲歌が生まれるまで』（思潮社）、『蜂蜜採り』（書肆山田、高見順賞）、『アジア海道紀行』（みすず書房、読売文学賞）など。

ベスト67」で、司馬遼太郎『坂の上の雲』、西田幾多郎『善の研究』、夏目漱石『吾輩は猫である』に次いで、『文明の生態史観』は四位に入っている。いかによく読まれたかということだろう。しかも、この本の読み方はまだまだ可能性があつて、さらに再評価される余地がある。

別の面では、青年期から登山と探検に精を出し、数々の学術調査隊に参加し、フィールド・ワークの方法を確立。それらの調査報告を作るにあたって考案された「B6カード」による情報の整理法。一つのカードに一つの項目を書く。そのカードを操作することで、情報の組み換えを行なう。それは先見的な情報処理法であつて、それを提唱した『知的生産の技術』はベストセラーになつた。「情報」という言葉がまだそれほど認知されていなかった時代、コンピューターも普及していなかった時代、『情報の文明学』が書かれ、現在の情報産業社会を予見した。いまも、これらの本をバイブルとする人間は多い。未来に対する優れた洞察力は、他に追隨を許さない。桑原武夫が「わたしは秀才だが、梅棹は天才だ」と言つたという話は有名だが、梅棹忠夫が手つけたあらゆるジャンルでパイオニアであつたということから、その肩書の一つで示すことはできない。一般的には、専攻は

民族学、比較文明学ということになつているが、この「比較文明学」という言葉も、「文化」よりも「文明」のほうが価値が低いと見なされていた時代に梅棹忠夫が創出したものであり、以後、「文明学」を学問のジャンルとして確立したのだった。

梅棹忠夫先生に初めてお会いしたとき、こんな素朴な質問をしたことを覚えている。

「これまでいろんな国を回られたと思いますが、行つておられない国はどこですか？」

梅棹先生はしばらく考えてから、こうおっしゃつた。

「安徽省だけは、行きそびれたなあ」

わたしはこの一言で衝撃を受けた。質問は国の名前だつたのに、先生は中国の省の名前をおっしゃつたのである。つまり、世界中を回られたのだ。中国の他の省はすべて回られたのだ。

サントリ―地域文化賞の選考委員会の打ち上げの席でのことである。わたしは平成十二年（二〇〇〇）から選考委員になつたが、梅棹先生は長く選考委員長を務められていた。「どうして日本人は年末になるとベートーベンの「歓喜」を歌うようになったのか、これはおかしい」と言われたり、気に入つた地域文化に出会うと、